論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　樋口　千紘

論　文　題　目

御伽草子における笛説話の形成

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	塩村　耕
委員	名古屋大学教授	近本　謙介
委員	名古屋大学准教授	大井田　晴彦

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、御伽草子（室町物語）の『横笛草紙』を取り上げ、第一部では諸本の問題を軸にして、物語の内容や諸本の成立を論ずるとともに、第二部で『横笛草紙』の重要な要素である名笛説話の流れについて、義経物の諸作品を比較しつつ検討を加え、笛説話がさまざまな物語を横断して、つないでゆく機能を持つことを示そうとするものである。

『横笛草紙』は『平家物語』に見られる滝口入道と横笛との悲恋物語で、いわゆる渋川版御伽草子にも入る。版本以外にも伝本の数が多く、諸本間の異同も大きく、複雑な性格を帯びている。第一部第一章では、伝八宮良純親王筆写本（以下、八宮本）に主に着目し、諸本と本文を比較し、八宮本は複数の古写本系諸本の独自本文を共通して有しており、複数の本を参考にして創作的に本文が生成されるという複雑な成立であることを指摘する。そして同じく横笛出生譚を持つ清涼寺本と比較し、八宮本は単に横笛の出生を示すだけでなく、横笛母侍従と大蛇との物語を伏線として効果的に機能させているとする。第二章では、名古屋大学日本文学研究室蔵本（以下、名大本）を取り上げ、まず名大本は版本のうち、御伽草子本よりも古活字本に近く、一方で古活字本やその源流にあると思われるパリ国立図書館蔵本に比べても独自本文があり、登場人物の心理描写を詳しくしている。また逆に御伽草子本に近い本文もあり、古活字本そのものではなく、それに近い別の本に拠っているとする。第三章は、瀧口と縁の深い高野山の地誌類に見える横笛の伝説を比較対象とする。そして、高天寺の稚児が死後に鶯に転生したという伝説が、横笛が死後に鶯に転生した説話と混同され、それが高野山の在地伝承に残るとともに、八宮本のテキストにも反映したとする。第四章では古写本の一つである清涼寺本にある横笛出生譚に見られる、弘法大師が天竺に渡って三本の笛を得たとする弘法大師笛説話に注目する。これを幸若舞曲や御伽草子の義経物に見える名笛説話と比較し、笛の威徳が持ち主を守る効能を持つとする。

第二部第一章は、義経物の幸若舞曲や御伽草子などのうち、義経が鬼一法眼を訪ねて兵法を獲得する説話において、名笛が果たす役割について考察する。まず名笛が漢竹の横笛と称されることが多いことから、漢竹の語義について確認する。そして諸作、諸本に見られる笛銘を比較し、弘法大師に由来する蟬折と小枝の一対の笛が、以仁王の手を経て、小枝は平家の敦盛、蟬折は源氏の義経の笛としてイメージが定着してゆくとする。第二章では、やはり義経による兵法獲得説話の御伽草子『判官都ばなし』を取り上げる。そこでは他の作品には見られない村雨丸という笛銘が登場し、これも中国に由来する名笛である。幸若舞曲『笛の巻』などと比較し、それらの義経物を利用しつつ、差別化を図ろうとして村雨丸の物語を創出したとする。

巻末に資料編として、八宮本と名大本の『横笛草紙』について、かな表記の多い本文に漢字をあてるなど、加工を施した校訂本文を提供している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の評価】

本論文は、従来論じられることの比較的少なかった『横笛草紙』に対する、初めての本格的な論考である。まず、従来の本文研究に、新たに八宮本と名大本とを加え、諸本の関係性を明らかにした点は、本論文の最も高く評価できる点である。その際に、名大本はもとより、個人蔵である八宮本についても、原本に直接ついて書誌学的な精査を加え、多くかなで表記された本文に漢字をあてて意味を明確化した加工本文を作り上げた上で作業を行っている。その中から本文について注釈的知見を多く得ており、たとえば誤写が多いために難解な清涼寺本の難読箇所についても、他の本や諸作品を参照して然るべき本文の復元を試みている。

論者が特に重視した八宮本と名大本とも、単一の祖本によらず、複数の古写本を参考にした複雑な成立を経ていることを検証しており、半ば創作的ともいえる本文生成過程の解明は、興味深い事例を提供している。今後、これを踏まえた上で、他作品についても本文研究を進めてゆくならば、御伽草子の本文流通について意義深い成果が得られるものと期待される。

次に『横笛草紙』のみならず、多くの義経物の諸作品を取り上げ、中世物語における笛説話の実態を幅広く解明した点も高く評価される。類似の笛説話がさまざまな物語を横断して響き合い、繋がってゆくさまを明らかにした。そのことは、そもそも説話において、笛をはじめとする楽器がいかなる意味を持つのかという、重要な問題を考える上で示唆的である。

本論文は中世物語の研究を進める上で、近世に成った地誌を多く参照している。近世に数多く作られた地誌こそは、土地にまつわる地理、自然、歴史、伝承、民俗を総合的に記述した文化誌で、より広く活用されるべきであるが、その点で本論文は近世期の資料を見ることによって、多くの結実を得ている。たとえば、青葉の笛を考察する上で、須磨寺の什宝について述べる名所案内の類まで参照しており、多様な資料を用いることによって、論に厚みを増している。

その反面、中世日本紀の世界など王権神話との関連について、考察がやや不足している。高野聖や萱堂聖など、遊歴の宗教者の関与の問題など、物語の生成発展と信仰の場との関係についても、先人の説を紹介するだけにとどまっている。作中の地名や寺名、人名などの異同が、いかなる意味を持つのかについて、積極的な考察が足りない。これらは何れも重要な問題を含んでいるが、いずれも今後の課題として長期的に取り組むべきであろう。

総じて複雑な『横笛草紙』諸本の本文とさまざまに格闘しており、同時に中世物語における笛説話の展開を見通した労作である。以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。